鹿児島県立博物館考古資料館

登録有形文化財（建造物）
平成 10 年 12 月 11 日登録
所在地：鹿児島市城山町
所有者：鹿児島県

県立博物館考古資料館は、明治 16（1883）年に真宗宗主大谷光尊が県に寄付した金十萬円を原資に、士族救済の授産事業として行う殖産興業を目途とした列品館「興業館」として建設された。現在鹿児島市内にある石造りの建物としては、磯の旧集成館機械工場の次に古い建物で、壁や床には県内産の石が用いられている。

この建物は、石造 2 階建てで、建築面積は 337.48㎡である。

左右対称となっている建物は基本的には洋風で平面形は単純な長方形だが、一階左右の入り口前に広いパーゴラを突き出して、お互いを外回廊で繋ぐ。その上部二階バルコニー部分には擬宝珠や斗型の軒飾り、一階に錫杖 彫りを付けた角柱や平たいアーチなど、和風な洋式とも言えるデザインで和洋折衷の特異な石造建築物である。

その後この建物は、第 2 次世界大戦前までは鹿児島市役所の仮事務所や県の商工奨励館として使用されたが、昭和 20（1945）年の戦災で内部が焼けてしまったため、昭和 28（1953）年に改装し、県立博物館として利用されていた。

近年まで県立博物館の考古資料館として利用されており、館内には南九州で発掘された土器や石器などの考古資料が展示されていたが、建物の老朽化のため現在は閉鎖されている。

鹿児島県立博物館考古資料館

鹿児島市庁舎本館

登録有形文化財（建造物）
平成 10 年 12 月 11 日登録
所在地：鹿児島市山下町
所有者：鹿児島市

鹿児島市庁舎本館は、大蔵省営繕管財局工務部によって設計が行われ、昭和 11（1936）年２月に起工し、当時の最新技術によって建設され、昭和 12（1937）年６月に完成した。建物は、地下１階、地上３階（塔屋部３階）で、建築面積が 2,898.8㎡の鉄筋コンクリート造りの建物である。

当時は、地下に機械室、１階に市民サービス部門、２階に市長室、議事堂及び工務部門、３階に政庁、貴賓室等が配置されていた。現在でも議事堂をのぞき、当時と同じような利用が行われている。

３階から中央に聳える塔や前面の垂直リブが垂直線を強調し、塔部の四角い垂直方向の連続窓が分離派からモダニズムに移行する時代をうかがうことができる。車寄せのアーチ上には、薩摩焼の円型陶板を特注してはめ込んでいる。

平面計画では、市長の強い意向により、ベースメント層を設けずに道路からストレートに入れるように計画している点などにも特徴が見て取れる。

鹿児島市庁舎本館

南日本銀行本店

登録有形文化財（建造物）
平成 10 年 12 月 11 日登録
所在地：鹿児島市山下町
所有者：株式会社　南日本銀行

南日本銀行本店（旧旭相互銀行本店）は、朝日通りと電車通りに面する場所に位置している昭和初期の建物で、県の技師三上昇の設計により、昭和 12（1937）年に竣工した建物である。

三階までのファサードは礎盤・柱身・柱頭で構成される円形の列柱十数本が軒を支える様式主義的表現で、銀行に求められる安心感を新古典主義建築として表現した。円柱の柱頭デザインにはアカンサスの葉で複雑に表現されるギリシャのコリント式を採用したが、柱身にはトスカナ式状の溝を持たない現代的表現となった。利用者に銀行の営業空間の表現に、頼れる安心感を期待したネオクラシズム（新古典主義）を採用し、四階から上の業務空間には当時の新しい流れであった分離派（西洋ではゼセッション様式）のデザインを臆せず奔放に表現した。新古典主義と分離派デザインとが共存して時代的背景をよく表現した建築であり、近代から現代への過渡期を代表する作品である。

なお、西側部分増築の際には地盤改良を行い、全面新築案を排して保全を図り、当時の姿をよく留めた努力は賞賛に価する。

南日本銀行本店

旧島津家芹ヶ野金山鉱業事務所

登録有形文化財（建造物）
平成 11 年 8 月 23 日登録
所在地：鹿児島市吉野町
所有者：株式会社　島津興業

島津家芹ヶ野金山鉱業事業所は、明治 37（1904）年、いちき串木野市（旧串木野村）に建設されたものである。建築様式は、建設面積 158.19㎡の洋風木造建築で、壁を下見板張り、２階のベランダの柱間には連続アーチをあしらって洋風を装っている。２階屋根が寄棟、正面右手の１階部分と玄関の屋根が丸みを帯びた入母屋のムクリ屋根となっている。

その後、大正 12（1923）年に株式会社島津興業の前身である薩摩興業株式会社の事務所として鹿児島市に移築された。昭和 26（1951）年に社名を変更した後も本社屋として利用されていたが、新社屋の建設に伴って昭和 61（1986）年に現在地に移築された。

近年、耐震補強工事を行なって、来訪者への安全に配慮している。

旧島津家芹ヶ野金山鉱業事業所
（写真提供：株式会社　島津興業）

旧島津家吉野殖林所

登録有形文化財（建造物）
平成 11 年 8 月 23 日登録
所在地：鹿児島市吉野町
所有者：株式会社　島津興業

島津家吉野殖林所は明治 42（1909）年、鹿児島市（旧吉田村）に建設されたものである。設計者は隈元長栄、施工者は丸田十兵衛であることが判明している。

建築面積 178.26㎡の平屋建ての洋風を志向する木造建築だが、前面に駒形手摺を付けたベランダが設けられ、玄関は切妻のムクリ屋根で破風下に懸魚を掛け、二本の柱を繋ぐ虹梁に丸十の家紋を入れた蟇股を載せる。他にも日本的造作が見られ、和洋の折衷された印象を与えている。

この建物は、昭和 61（1986）年に現在地に移築され、磯工芸館として薩摩切子の展示場及び売店として使用されている。

旧島津家吉野殖林所
（写真提供：株式会社　島津興業）

仙巌園内濾過池

登録有形文化財（建造物）
平成 13 年 8 月 28 日登録
所在地：鹿児島市吉野町
所有者：株式会社　島津興業

仙巌園内濾過池は、国指定名勝「仙巌園附花倉御仮屋庭園」の指定区域内にあり、仙巌園西方にある千尋巌付近から石製水道管を伝って流れてくる湧水を濾過するためのもので、明治 40（1907）年 9 月に 2 か月間の工期で竣工したものである。

この仙巌園内濾過池は、地下 2.4m の位置に布設された水道石管から取水し、濾過の後に敷地内各所に配水する。大型切石積の壁面から石造ヴォールト天井を架け、その上に和風を意識した切妻屋根を置いたものである。石造技術は見事で鹿児島の石造文化の特質をよく示している。

濾過池内部

仙巌園内濾過池

鹿児島県立鹿児島工業高等学校大煙突

登録有形文化財（建造物）
平成 16 年 6 月 9 日登録
所在地：鹿児島市草牟田二丁目
所有者：鹿児島県

鹿児島工業高等学校機械科で使用する工作機械を稼動させるためのスチームボイラーと共に大正 9（1920）年に建設された。

高さ 18m の煉瓦造煙突で、八角形の基壇部分は堅牢なイギリス積み、塔身の本体部分は小口積みとして構築された。

ボイラーは、鉄製で、直径 1.2m、周囲 4.5m の円筒形である。

構築技術の見事さ、保存状態のよさ、附属しているボイラーも現存していることから、学校や地域の景観に欠かせない存在となっている。卒業生にとっても愛着の深い存在である。

鹿児島県立鹿児島工業高等学校大煙突

鹿児島市中央公民館

登録有形文化財（建造物）
平成 17 年 11 月 10 日登録
所在地：鹿児島市山下町
所有者：鹿児島市

鹿児島市中央公民館は、従前は鹿児島市公会堂で、皇太子（昭和天皇）の御成婚を記念して市が計画し、昭和２(1927)年に竣工した。建物周囲にドライエリアを設け、建物は鉄筋コンクリート造で柱を等間隔に並べ梁で繋いだラーメン構造で、地下一階地上三階建となっている。

正面立面及び平面をほぼ左右対称とし、玄関両脇に階段室塔屋を配し、その間に４本のピラスター、軒のパラペット下にロマネスク様のロンバルディアベルト（円弧の繰返し）を廻し、イスラム風尖頭アーチの窓を設置するなど、東洋趣味の意匠を有することがひとつの特徴である。

一流の建築家（片岡安）が手がけた初期の公会堂建築として貴重であり、地方の建築家に影響を与えた洋式近代建築のひとつとして価値が高い。建築の規模などからして使いやすく、現在も市民に親しまれて良く使われている。もっと高い評価がふさわしい。

鹿児島市中央公民館

鹿児島大学総合研究博物館常設展示室 一棟

登録有形文化財（建造物）
平成 18 年 10 月 18 日登録
所在地：鹿児島市郡元一丁目
所有者：鹿児島大学

鹿児島大学総合研究博物館常設展示室の建物は、昭和３(1928)年、鹿児島高等農林学校の図書館書庫として建てられた。

鹿児島高等農林学校は、明治 42 (1909) 年、開校、明治 44 (1911) 年に石造の書庫が建てられたが、内部の棚が白蟻の被害に遭い、昭和３(1928)年に鉄筋コンクリートに建て替えられた。

昭和 20 (1945) 年、鹿児島空襲において、鹿児島高等農林施設の約半分はすっかり焼けてしまったが、燃失を逃れ、その後高等農林時代の木造建築が次々と姿を消す中で、唯一残った施設がこの旧図書館書庫である。

鹿児島における初期の鉄筋コンクリートであり、最も古い学校施設として、歴史的に重要な役割を担っている。

鹿児島大学総合研究博物館常設展示室

南洲神社電燈　一対

登録有形文化財（建造物）
平成 18 年 10 月 18 日登録
所在地：鹿児島市上竜尾町
所有者：南洲神社

南洲神社電燈は、大正２(1913)年、集成館で製造され、鹿児島電気株式会社より西郷隆盛を祭る南洲神社に奉納されたものである。

電燈は、南洲神社拝殿の参道、石段を登った両脇に２基対に立つ。高さ 4.4m 鋳鉄製で六角形の柱身部分、六方に開いた花弁型の形状をした柱頭部分、そして新しく更新された電燈部分とそれを支える脚部より構成されている。花弁状の柱頭飾りや各接合部の繰型などの装飾など高い鋳造技術によって製造されている。

近代日本の礎となった旧集成館が製造した数少ない遺構である。

南洲神社電燈

潮音館（旧重富島津家住宅米蔵）

登録有形文化財（建造物）
平成 19 年 5 月 15 日登録
所在地：鹿児島市清水町
所有者：個人

鹿児島湾の北端に位置した島津久光四男珍彦（旧重富島津家、元貴族院議員）の別邸地内に残る旧米蔵である。

桁行（正面）５間、梁間（側面）２間半の規模で、切妻造、桟瓦葺の平屋建であり、妻上部に島津家の家紋を刻んだ石をはめている。窓の庇をかねた楣石や軒蛇腹の石材加工の精度も高い。

近年、喫茶店として活用されていた。

潮　音　館

登録文化財

鹿児島県立甲南高等学校本館

登録有形文化財（建造物）
平成19年7月31日登録
所在地：鹿児島市上之園町
所有者：鹿児島県

鹿児島県立甲南高等学校は、明治17（1884）年、県立中学造士館として設立されて始まる。

本館は、昭和5（1930）年に九州の旧制中学校では初の鉄筋校舎として竣工した。敷地北側及び東側に寄って建つ。鉄筋コンクリート3階建で、平面はL字形で、幅10m、北側長さ112m、東側長さ82mの規模である。北東隅の曲面部に正面玄関を置き、上部はドーム状の塔屋となっている。校長室に奉安殿が残る。

設計者は鹿児島県技師であった三上昇である。

昭和20（1945）年10月、進駐米軍の兵舎となり、昭和24（1949）年、第二鹿児島中学校と鹿児島第二高等女学校と統合、新制県立甲南高等学校として発足し、現在に至っている。

現在でもコンクリートは建全で、地元の建築技師が手がけて完成した、初期の鉄筋コンクリート造学校建築として貴重である。

鹿児島県立甲南高等学校本館

鹿児島県立鹿児島中央高等学校本館及び講堂

登録有形文化財（建造物）
平成19年7月31日登録
所在地：鹿児島市加治屋町
所有者：鹿児島県

鹿児島県立鹿児島中央高等学校は、旧制鹿児島県立第一高等女学校として、県の技師岩下松雄により設計され昭和10（1935）年9月に竣工した。

新築直後に陸軍特別大演習が実施された際には、昭和天皇が行幸し、本館に大本営が設置された。昭和20（1945）年8月1階北側を全焼、修復ののち昭和39（1964）年3月まで県立鶴丸高等学校の校舎として使用、同年4月から県立鹿児島中央高等学校校舎として使用され現在に至っている。

敷地西側に建ち、コンクリート造3階一部4階建で、平面は口の字形、南北55m、東西77m、幅11mの規模である。南東に講堂を置き、北西隅を曲面でつくり正面玄関とし、上部アーチ状の縦型窓を開き、円形平面の4階部分をつくるなど、コンクリート造の特徴を活かした建物である。

鹿児島県立鹿児島中央高等学校講堂

鹿児島県立鹿児島中央高等学校本館